

〈OB・OGだより〉

地域構想学科10周年に寄せて

戸塚泰久

(2期生, 2010年卒, 岩動ゼミ)

1. 地域構想学科との遭遇

私はとにかく「足を使う」ことが好きだった。見たことのない土地に、自分の足で赴き、見たことのないモノに触れる。「なぜコレはこんな形なのか?」「なぜここではコレが特産品なのか?」とにかく知りたい。知って調べて、理解したい。理解した瞬間、何とも言えないスッキリとした、快感にも近いような、幸せな気持ちになる。はっきり言って『変な人間』だ。自分でも重々分かってはいた。それまで周りに私と同じ感覚を共有できる人間に出会うことは無かった。地域構想学科に出会うまでは。

私が地域構想学科の存在を知ったのは2005年。当時、地域構想学科は出来たてで、まだ高校3年生の私は存在すら知らなかった。「ああ、仙台のマンモス大学が、よく分からない学科を始めたのか。」程度の印象である。今思うと随分失礼だが、おおむね今の高校生たちが新設の大学に抱く印象も、こんな具合だろう。

しかし、よくよくホームページや資料に目を通すと、徐々に興味深いことに気付いてきた。足を使い、その土地に赴き、研究し、発信する。多くの人が気付いていない文化、技術、その他もろもろ。そう、なかなか周りに共有できなかった、快感にも近いような、あの幸せな気持ちに向かっていく様子が、私には感じられた。かくして私は2006年の新春、雪深い冬の岩手の地で地域構想学科受験を志すことを決めた。

2. 地域構想学科での学びと出会い

2006年4月、入学後最初の基礎実習で「今日は川が作り出した地形（この時は河岸段丘）を肌で感じに行く」と松本秀明先生が仰った。私の脳内は「?」だらけ。それ以前に、その実習をやる意味が分からなかった。河岸段丘といえば、中学校の地理の授業でもさんざん教わる、あの河岸段丘である。「今さら何を言っているんだ…。」という気持ちのままで、

その実習に臨むこととなる。「教科書通りの説明と、それを示す光景しか見ることは出来ないだろう…。」そう考えていた私に、あの感覚が突如やってきた。

河岸段丘が形成された後、土地利用や歴史、さらにその後の開発など、同じ土地が今に至るまでにたどった経緯。それを自分の足で見て、まとめるという一連の流れに、私はすっぴんのめりこんでいた。思えば、これが地域構想学科生としてのスタートだったのかもしれない。それからの実習はとにかく面白い、幸せな感覚を共有できる時間となった。

同じ年、秋のキャンパス外実習は、その後の大学生活を揺るがすものであった。私の恩師・岩動志乃夫先生との出会いである。もともと地場産業や地域の経済に興味があった私は、2年生以降の実習等も見据え、地域経済系の実習に参加。しかし、実習地を聞いて参加を躊躇する。その実習地とは、仙台から遠く離れた栗原市石越、旧細倉鉾山跡だった。調べたところ、どうも仙台駅から実習地まで、JRとくりはら田園鉄道(以下、くり電と称す)を乗り継ぎ、片道2時間以上かかるらしい。私の心は揺れた。周りには、移動時間が長すぎる、1日だけの実習に必要なコストが高い諸々の理由により、実習を変更する者が現れた。だが、運よく直前の基礎実習が岩動先生の担当となった。先生はくり電の歴史、鉾山の歴史等を切々と語られた。まるで、自分のコレクション品をひとつひとつ丁寧に磨く、純粋な少年のような目で先生は語られた。最終的に「万が一後悔するような実習内容でも、廃線間際のくり電を眺められるだけで素晴らしいじゃないか。」という気持ちで、片道2時間以上電車で揺られ、旧細倉鉾山跡に向かうのであった。

実際の実習は、岩動先生の熱弁を超えるものとなった。もともと鉛、亜鉛鉾山として発展した細倉鉾山は輸入鉾石の価格競争と需要減少に押され、鉾脈を残したまま閉山した。しかし、他にない非鉄金

属の加工ノウハウを活かし、車両用鉛バッテリーからの鉛抽出事業を展開。現在も細倉金属工業㈱として事業を続けている。時代とともに歩み、形を変えつつもその土地で続く産業の姿に、私は非常に興味を持った。また、あまり広く社会に知られていないながらも、その魅力にスポットをあてる岩動先生を見て、希望ゼミを決めたことは言うまでもない。

3. 卒論作成時の思い出

大学生活も4年目にさしかかった2009年早春、私も卒業論文のテーマを決める時期となった。3年間で東北地方の地場産業を学部生なりに調べ、ある程度知識を得ていた私は、一つの産業に注目していた。岩手県北部で行われていた漆産業（浄法寺漆）である。東北はじめ日本全国には、漆を用いた工芸品は多数あり、文献も多数存在した。しかしながら漆そのものを論旨とした文献はほとんど無く、浄法寺漆に関する文献はわずかであった。産地である岩手県二戸市は、岩手県の県北、青森県と接する。仙台からは新幹線で片道約8,500円、バスを使っても片道約5,000円かかる。細倉鉱山は1日の実習で終わったが、卒業論文のため二戸市に通うとなると、さすがに貧乏学生には堪える。考えた結果、50cc原付バイクという手段を選んだ。これなら、交通費はガソリン代の片道約1,000円のみ。運転時間は8時間程度必要だが、充分通うことは可能である。今これを読んでいる学部生で、僻地への交通手段に迷っている者は、是非原付も一考していただきたい（交通安全第一）。

さて、原付バイクにより順調に調査を始めたかに思えたが、ご存じ昨今の地場産業を取り巻く環境はどこも厳しいものである。「伝統だから」、「素晴らしい技術だから」という理由で、売上や後継者数が伸びるほど単純な話ではなかった。浄法寺漆も例外ではなく、後継者不足と売上低迷に活路を見いだせていない…かと思いきや、事態は思いもよらぬ方向へ動いた。

漆産業の調査は、二戸市と同時に盛岡市の岩手県工業技術センターへも同時に行っていた（もちろん移動は原付）。半年ほど調査が続いた頃、いつも対応している職員の方より「ちょっと見せたいものが…」とのことで、別の場所へ。部屋に入ると、ハンドルはプレーキレバーなど、自動車の内装品がずら

り。なんでも、大手自動車メーカーと提携し、高級車へ装備する漆塗り内装パーツの開発を進めていたとのこと。これこそ他地域にない独自性であり、現代社会で伝統産業が生き残る手段であった。私の感動は最高潮に達した。この自動車パーツの取り組みを教えて頂けなかったら、論文は全く違う方向性のものになっていたのかもしれない。センターの方のご厚意に本当に感謝しなければいけないことと、『自分の足を使う』ということの重要性を身に染みて感じた卒業論文であった。

4. おわりに

就職にあたっては、入学以前からマスコミ業界に漠然とした興味があった。興味はあったものの、こういった職種を目指すのか…。地域構想学科の各実習やゼミで「あまり世間の認知度は高くないものの、他地域に無い魅力的なもの」が日本各地に存在していることを知った。知ってしまったからには、発信したい。この魅力をもっと広めたい。伝えたいと考えようになった。

現在、結婚式のダイジェストVTRをはじめ、様々な動画コンテンツの撮影、編集に携わっている。その根幹にあるのは、「足を使う」ということだ。本番だけ力を注ぐのではなく、事前準備や段取りのチェックを自らの目と体で確認。撮影される方の性格や好みなども徹底的に確認しておく。そうした一つひとつの積み重ねがあって、良い映像が出来上がるのではないかと、私は思う。



2014年10月、東京都中野区の職場にて

地域構想学科での経験は、私の生き方に大きな影響をもたらした。自分の「知りたい」欲求を思う存分解放できるフィールドであり、今後もあの「幸せな気持ち」を抱く学生が切磋琢磨できるフィールドであってほしいと思い、学科創設10周年に寄せる私からのメッセージとしたい。